甲第 50 号証

令和元年（ワ）第２３６９号　国家賠償請求事件
原　　告　原告番号１，２
被　　告　北海道（代表者知事鈴木直道）

陳　述　書

２０２０年 11 月 26 日

札幌地方裁判所民事５部合議係　御中

（証人N）

氏名 [redacted]

私は、２０１９年の７月１５日に、この裁判の原告であるお二人が警察から力づくで排除された現場に偶然居合わせましたので、当時見た状況をお伝えいたします。

私は、当日、安倍首相が来るということを知らずに札幌駅へ行きました。札幌駅へ着いたところ、大勢の人がいて、見るからに警察官と思われるスーツ姿の男女も多くいました。前知事である高橋さんの選挙カーもあり、安倍首相が来て演説をするというので、私は聞いてみることにしました。

私は、札幌駅南口広場の南側の植え込みの近くに居ました。タクシープールの西側で道路を挟んで正面やや右に大きな街宣車が見える場所です。安倍首相の演説が始まると、男性が叫ぶのが聞こえました。数名の警察官がものすごいスピードで彼を東側へ連れて行きました。

私が見た限りでは、男性が周りの人とトラブルになりそうな場面は全く見られず、警察官が一方的に物凄いスピードで、何人もで取り囲み、力を使い男性を排除しているとしか見えませんでした。会場には、安倍首相を応援するようなプ

ラカードを掲げている人もいましたが、私の周りの人達は道路を挟んでいたこともあり、また、男性の排除が一瞬のように思われたので、男性に対して何か悪口を言うような人も見られず、このことで雰囲気が悪くなるようなことも感じられませんでした。

その次に、私よりも西側で、女性が安倍首相に抗議するような声を上げました。私は、さきほどの男性のときのように警察官が複数名で暴力をふるうのではないかと心配になり、彼女が怪我をさせられないように警察官の行動を見張りたいと思い、彼女の近くに行こうと思いました。

私は、札幌駅南口広場にある銅像の西側まで移動して、声を挙げた女性の方へ近づきました。彼女が第一声を上げてから、彼女のことを悪く言うような言葉は聞こえませんでした。彼女が周りの方とトラブルになっているような雰囲気もありませんでしたし、「危ない」、「やめて」、「前へ進まないで」などの声も聞こえませんでした。ただ、声のした方を向いて注目している人は何人もいました。

私が彼女を見つけたときには、彼女を警察官が大勢で囲み、彼女の動きを止めようと手足で静止しているように見えました。警察官には、説得するような様子は見られませんでした。私は彼女が怪我をするのではないかと心配になり、かなり近くまで接近し、「乱暴しないでください。」と言いました。また、警察官たちが彼女の動きを止めようと脚を使っているのを、取り囲んでいる様子から見えたので「脚を使っている！」と声を挙げて批判したりしました。彼女は、サンダルに素足という格好で、取り囲んでいる警察官の隙間から彼女の脚を見たら、ふくらはぎあたりがうっすらと擦り剥けているのが見えました。その間、警察官から「危ないから離れて！」と言われましたが、危ないのは警察官の行動であって、周りにいる私たちはただ見ているだけですので、何も危なくありませんでした。また、警察官から「(彼女の) お母さん？」と声を掛けられましたが、特に返事はしていません。

彼女自身に、見ている人への敵意は感じませんでした。また、周囲の人は騒動

を面白半分に見ている人が多いように思われ、彼女に対する敵意等は感じられませんでした。ましてや彼女を恐れている人はいなかったと思います。

そのまま彼女は警察官にガラス張りのところまで連れて行かれました。途中で抵抗をしていましたが、複数の警察官に押し切られるようにして連れて行かれました。このガラス張りの場所をアピアドームと呼ぶことをあとで知りました。このアピアドームのところでも、警察官は何人もいて彼女を取り囲んでいたので、とても威圧的な感じでしたが、あまり緊迫している感じではありませんでした。彼女がアピアドームの周りにあるベンチを蹴ったというのは見ていません。

私は、このアピアドームの周りで、警察官の様子を写真に撮っています。あまりにひどい状況でしたが、私には止めようがなく、とっさに撮影したものです。その写真の中には、警察官が彼女の腕を掴んだ瞬間を撮影したものがあります。これは、彼女が安倍首相に向けて声を上げようとして、右手を上に挙げようとした途端、警察官がその腕を左手でつかんで上へ挙げられないように押さえつけたシーンを撮影したものです。安倍首相が彼女の抗議に気付かないように警察が押さえつけたように見えました。

その後、経過は忘れましたが、安倍首相の演説が終わり、彼女と警察官がもっと北側の方へ移動していきました。もう安倍首相の演説に対するヤジは出来ないので、警察は彼女にこれ以上ひどいことはしないだろうと思い、私は北側へ付いていくことはしませんでした。

その後、安倍首相がいなくなった後だと思いますが、会場の人がまばらになったとき、彼女が警察官に両腕を組まれて挟まれた状態で連れて行かれるのに気づきました。札幌駅前の建物（あとでこの建物が交番だと教えてもらいました）の近くを歩いていました。私が気付いたのは、彼女の両腕を左右から二人の私服警察官が掴んでいたのと、その後ろに１名スーツ服の警察官がいたことです。まるで犯人を連行しているように見えたので、私は彼女をどこかに連れて行き、取

調べをするのではないか、それはひどいのではないか、と思いました。私は、彼女に不利益なことがないように見守りたいと思ったので、どこへ向かうのか分かりませんでしたが、後ろからこっそり付いていくことにしました。

彼女と警察官は、大丸の西側を通って北上し、ＴＳＵＴＡＹＡのある建物へと向かって行きました。このときもずっと、両脇の警察官２名は、彼女の両腕を掴んで、腕を組んで自由を奪っているように見えました。私は後ろから見ていたので、その様子がはっきりと見えました。このときも、まるで犯人を連行しているように見えました。そして、ＴＳＵＴＡＹＡのある建物に入っていったので私も続きました。２階にあるＴＳＵＴＡＹＡの入り口を越えた先の場所で、彼女が男性と女性の警察官に対して、「家についてこないで」、「離れて」、「自由に行かせて」ということを言っていたのが聞こえました。私は、警察官が家までついて行くということを言っているのかと思って、それはひどすぎると思いました。そこで、私は、彼女に近づき、「名前や住所は言わなくてもいいんだからね。」と伝えました。私服の警察官は、「（彼女との）関係はなんですか？」と私に聞いてきました。私は、「一市民です。」と答えました。それに対する警察官の返事はありませんでした。

その後、彼女はＤＶＤ等の陳列棚のある店内奥に入っていき、警察官も奥には入っていきませんでした。私は、これで警察官の過度な介入は終わると思い、１階に降りて行きました。１階に降りたところで、札幌駅前で彼女を取り囲んでいた女性警察官１名が、イアホンで何かを連絡しあっているような様子を見ました。

その後、彼女がもっとひどい目に遭うとは思ってもいませんでした。最後まで彼女のそばにいてあげられず、申し訳ないと思っています。そこで、彼女が裁判をやっていると聞いたので、応援のために今回、弁護士さんにお話をしようと思ったのです。

以上

甲第 52 号証

令和元年（ワ）第２３６９号　国家賠償請求事件
原　　告　原告番号１、２
被　　告　北海道（代表者知事鈴木直道）

陳　述　書

２０２１年４月　１日

札幌地方裁判所民事５部合議係　御中

証人T（桐島さと子）

氏名[redacted]

私は、２０１９年７月１５日、大杉雅栄さん（以下「大杉さん」といいます。）と行動を共にしていましたので、当時見聴きした内容をお伝えいたします。

１　私は、同日のお昼ごろ、友人の一人である[redacted]さん（以下「[redacted]さん」といいます。）から、同日に安倍前首相がＪＲ札幌駅前で演説する旨を知らされました。そこで、私は、大杉さんとともに、安倍前首相の演説を聴きに行くこととしました。[redacted]さんも、安倍前首相の演説を聴きに行くとのことでしたので、現地で集まる旨の話をしています。

なお、安倍前首相の演説を聴きに行く旨決めた時点では、安倍前首相に対し、何らかの行動を取るといった話は出ていませんでした。ただ、私は、もし現地で安倍前首相に対し、批判的な主張をしている人がいれば、その人に合流し、プラカードを掲げるくらいはしようかと漠然と考えていました。もちろん、大杉さんが、安倍前首相に対し、危害を加えようという様子も全くありませんでした。

２　私と大杉さんは、地下鉄でＪＲ札幌駅へと向かい、午後４時１０分ころ到着

しました。

ＪＲ札幌に到着した私と大杉さんは、まっすぐ２０２０年２月２７日付訴状別紙・地点Ａへと向かいました。すると、そこにいたスーツ姿の男性から「ここは一般の人向けの場所ではない。出入口もあって通行の邪魔だからどっか行ってくれ」と言われました。大杉さんが、その男性に対し、「警察ですか？」と尋ねると、その男性は、「警察だ」と答えました。

地点Ａには、私達の他にも聴衆がいましたし、通路のスペースも確保できていました。また、近くにいたおばあさんも「せっかく安倍さんが来るのでここで見る」と述べていました。そこで、私達が動かずにいると、その男性は「しょうがねえなあ」という趣旨のことをつぶやいて、それ以上何も言わなくなりました。

なお、乙６で大杉さんが「桐島さと子」の文章を転載していますが、この「桐島さと子」とは私のことです。この文章にあるとおり、私のすぐうしろには、安倍政権を支持する旨の紙製のプラカードを持った男性がおり、私は少し居心地の悪い思いをしていました。この文章では、「この国の民衆は条件さえ整えば「やる」だろう」と書いています。もっとも、この文章の注において、関東大震災を引き合いに出しているように、そう簡単にここでいう「条件」が整うとは思っていません。当然、大杉さんが安倍前首相に対してヤジをとばした本件でも、「条件」が整ったなどと感じた瞬間はありません。もし、「条件」が整ったなどと感じれば、私はすぐにこの場を離れていたはずです。

3　安倍前首相の演説が始まると突然大杉さんが大声を上げ始めました。このときの私の立ち位置は、選挙車両の方向を前とすると、大杉さんの右斜め後ろでした。そして、[redacted]さんは、私の左隣に立っていました。私たちは、通路のスペースを意識しており、３人の間隔はほとんど空いていませんでした。私は、大杉さんが安倍前首相を批判する内容を発言していることから、周りにいた自民党支持者はどのような反応をしているのか気になり、周りを観察しよう

と思いました。被告の主張によれば、聴衆から「おまえが返れ」「うるさい」などという怒号が上がったとのことです。しかし、私は、このような声は聴いていません。近くにいた私の耳にこのような声が届いていない以上、怒号があったなどということはできないと思います。

そして、大杉さんが一言二言声を上げた次の瞬間には、数人の足音が聞こえ、大丸方向から手が伸びてきて大杉さんを捕まえました。そのまま大杉さんを連れて行こうとするのを見て、私は、大杉さんの腰のあたりにしがみつきました。大杉さんを連れて行こうとする何者かに抵抗しようと、とっさに取った行動でした。

大杉さんを連れていこうとする人たちは、４、５人の男性であり、私がしがみついた状態の大杉さんを、難なくその場から地点Ｂへ、そして地点Ｃへ移動させました。移動させる力が弱まったのは、地点Ｃに着いてからのことです。力が弱まったことをきっかけに、私は、大杉さんから手を放しました。また、私は、地点Ｃまで引きずられる間に、大杉さんを引きずっているのが、制服を着た警官であることを認識しました。地点Ａで大杉さんの排除が始まったときは、あまりにも突然であり、誰が大杉さんを排除しようとしているのか把握することができなかったのです。なお、被告側がいう地点３において、大杉さんが車道の方へ突然走り出したなどということはありませんでした。

私は、大杉さんから手を離すと、表に「やだ」裏に「うんざり」と書かれたプラカードを取り出して、大杉さんのヤジに合わせて頭上に掲げました。しかし、すぐに、警察官が何の理由も告げず、一方的に大杉さんを排除しようとしていることは大きな問題だと感じました。そこで、問題行動を記録するため、携帯電話を出して撮影を開始しました。

地点Ｃ到達後、大杉さんは、警察官に誘導されて南側へと横断歩道を渡っていきました。大杉さんは、横断歩道をほとんど渡り切ったところで、突然、地点Ｄの方へ走り出しています。そして、選挙車両の近くで警備をしていた警察

官につかまり、地点Ｅまで押し返されました。この間、警察官は、大杉さんに対し、「近づかないで」「大声出さないでってお願いしている」などと述べていました。しかし、そのようにお願いする理由が、「聴衆との間でもめごとが起こるからだ」とか、「車道に飛び出されると危ないからだ」というように説明することはありませんでした。

警察官と大杉さんが押し問答をしている間、大杉さんは、怒鳴ったり暴れたりすることはなく、強制排除の法的根拠を問い続けていました。大杉さんの強制排除は何の警告もなく突然なされたものであり、このような問いをすることも当然のものと思います。しかし、警察官たちは、「(ヤジで) びっくりしておばあさんが倒れたらどうするの。」などと非現実的なことを言うばかりで納得のできる説明をすることはありませんでした。

今回裁判になって初めて強制排除の根拠説明がなされています。しかし、実際にこの排除行為がなされた日、警察官から被告が法廷で主張するような事情は一切聴かされていません。被告の主張は明らかに後付けのものといえます。

4　私は、地点Ｅでも撮影を続けていましたが、突然スーツを着た男の人が、「(警察を) 撮ってんじゃねーぞ」と言い、私の携帯電話めがけて手を伸ばしてきました。私が慌てて携帯電話をひっこめると、それ以上何かをしようとはせず、その場を離れようとしました。このタイミングで、警察が、この男性から話を聴いていましたが、この男性はすぐに解放されていました。

なお、この男性は、私に対し、しつこく絡むということはしておらず、身の危険を感じることはありませんでした。

5　その後、地点Ｆまで歩きました。このとき、私は、警察官に対し、付いてこないで欲しいという意味を込めて、「いつまで付いてくるのですか？」と尋ねました。しかし、警察官は私たちから離れようとはしませんでした。私は、警察官がいつまでも付いてくるのが嫌で、大杉さんと共にタクシーに乗りまし

た。このとき[redacted]さんだけは、タクシーに乗っていませんが、その理由は聴いていません。

大杉さんと私は、ダイコクドラッグ狸小路４丁目店の横辺りでタクシーを降りています。そこから、安倍前首相の次の街頭演説場所である札幌三越前に向かいました。

6　札幌三越前まで行くと、既に安倍前首相の演説は始まっていました。私は、札幌駅前のこともあり、また大杉さんが声を上げるのではないか、そして、警察により排除されてしまうのではないかと考え、いつでも撮影ができるように携帯電話を手に持っていました。そして、ちょうど地点Ｇのあたりを北方向へ通り過ぎようとしたとき、安倍前首相が見えました。私は、大杉さんが声を上げるとすればこの辺りだと考え、撮影を開始しました。するとその次の瞬間、大杉さんが立ち止まり、「安倍やめろ」「バカ野郎」と叫び始めました。私は、すぐさま携帯電話を大杉さんのほうへ向けました。すると、選挙車両の周りを警備していた警察官が寄ってきて、何の警告や説明もすることなく、大杉さんを地点Ｈまで連れて行きました。大杉さんはあっという間に地点Ｈまで排除されてしまったのであり、排除の動きはかなり激しいものでした。また、この間、大杉さんが「首を絞めるな」と言ったのを聴いています。

7　地点Ｈで大杉さんが警察官と話をしていると、地点Ｆで別れた[redacted]さんが現れました。[redacted]さんには、相変わらず警察官が付きまとっていました。私は、[redacted]さんと合流した私たちも、また警察官に付きまとわれるのかと思い、辟易しました。

そこで、私と大杉さん及び[redacted]さんは、警察官による付きまといから逃れるために、席が空いているカフェを探すことにしました。カフェの店内までは警察官も付いてこないだろうと考えたためです。また、一度座って休憩したいとも考えていました。

しかし、なかなか空いているカフェを見つけることができず、その間１０人

程度の警察官による付きまといが続きました。もちろん、私たちが警察官の付きまといを許したなどという事情もありません。

最終的にＫＩＮＯＣＡＦＥ（札幌市中央区南三条西６丁目）に入ることができ、警察官の付きまといから解放されたときは、とてもほっとしました。

以上

甲第 53 号証

令和元年（ワ）第２３６９号　国家賠償請求事件
原　　告　原告番号１，２
被　　告　北海道（代表者知事鈴木直道）

陳　述　書

２０２１（令和３）年３月２８日

札幌地方裁判所民事５部合議係　御中

原告１　大杉

氏　　名 [redacted]

1　2019年7月15日午後4時頃、私と友人2名は、札幌駅前に着きました。

札幌駅前の北海道銀行前には自民党の街宣車が停められており、他の政治家（鈴木直道北海道知事など）が演説していました。私達3人は街宣車から道路を挟んで北側の歩道に立ち、安倍前首相の演説が始まるのを待っていました（訴状添付の別紙地図のA地点）。

私たちの周囲には、テレビや新聞社などのメディア関係者のほか、私服警官と思われる人物や制服警官、そして自民党支持者と思しき聴衆が立っていました。

このスペースで待っている間、近くにいたスーツにノーネクタイの小太りの男性から「ここは聴衆のスペースではないので、道路を挟んで後方に移動してほしい」「警備上の理由からだ」「ここに人が集まると他の歩行者の通行に影響が出る」という旨の声がけをされました。

しかし、その場で立って待っている人は他にもたくさんおり、また歩行者が通行するスペースは私の後方に十分確保されているように見えました。そのため、自分たちだけが移動を促される理由も、それに応じるべき義務も感じられなかったため、断りました。

この男性とのやり取りの中で、私が「あなたは何者なんですか。警察ですか」と質問したところ、「警察だ」との回答がありましたが、その男性は、警察手帳なども提示しなかったので、その時点では本当に警察官かどうかはわかりませんでした。

また、男性はスーツの襟に青っぽいバッヂをつけていたので、「それはなんのマークですか」と聞いたところ、「あんたには関係のないことだ」といった返答があり、それ以上の説明はありませんでした。

男性はしつこく何度か声がけをしてきましたが、こちらが移動について断っていると、やがて諦めたのか、「しょうがねえな…」と呆れたようにつぶやいたあと、やがて何も言わなくなりました。

そのようなやり取りと並行して、街宣車の上に安倍前首相が現れました。安倍前首相は、高橋はるみ氏が演説している横に立っていましたが、やがて高橋氏による紹介を経て、演説をはじめました。

私がこの現場に行く前に想像していたのは、2017年の東京都議選において行われたような、安倍前首相への反対者が激しくヤジを飛ばす光景であり、そう

した抗議行動の末席に加わってヤジを飛ばすことをぼんやりと想像していました。

しかし、この日の札幌の演説において、そのようなことは起こらず、現場では、「安倍総理を支持します」といったプラカードや日の丸の小旗が、どこからともなく配られ、また「がんばれ！安倍さん」などと書かれた横断幕が掲げられていましたが、安倍前首相に反対するプラカードやヤジのたぐいは一切見られませんでした。

安倍前首相の演説が始まるか始まらないかのタイミングで、自転車で道路を走る女性が、「あべさーん！」と大きな声で叫ぶ場面がありましたが、特に誰にとがめられることもなく走り去っていきました。

私は、安倍前首相が演説している様子を横目に、同行していた２名の顔を振り向いて見ましたが、二人は特に何をしようという様子でもありませんでした。私達は「一緒にヤジを飛ばそう」と事前に申し合わせて、演説現場に来たわけではなく、自民党支持者や警察が周囲に多くいる状態で「一緒にヤジを飛ばそう」などと声に出して相談する余裕もありませんでした。そのため、「やはり抗議などせずに帰ろうか」という考えが頭をよぎったものの、何もせずに帰ったとしたら、敗北感にさいなまれるだけだと思い、独断でヤジを飛ばすことを決めました。

私が手をメガホンのように口元にあて、顔を少し上に上げた状態で、「安倍やめろー」、「帰れー」、「安倍帰れー」と叫ぶと、周囲の聴衆などがこちらを見るような反応を示しました。

私がもう一度「安倍やめろ」と口にするのとほぼ同時に、主に背後から体を掴まれる感覚がありました。この時点で、安倍前首相が演説を開始してから一分ほど、私がヤジを飛ばし始めてからほんの 10 秒程度しか経っていませんでした。私は、反対の声を安倍前首相に届けるために来たのに、移動させられてはたまったものではないと思いました。しかし、物理的に抵抗するよりも声を上げ続けることに意識を集中し、「安倍やめろ」と何度も口にしました。そして、声を上げながら、そのまま演説会場後方（訴状添付地図 B 地点）に移動させられました。

私を掴んできた人物は、私の上半身を掴んで後ろに倒すような形で重心を移動させてきたほか、身動きが取れないように拘束してきたため、もしも私が抵

抗したとしても無駄だったでしょう。また、もし、私がこの時抵抗していたら、転倒してけがをしてしまいかねませんでした。そのため、私は、私を掴んできた人物に物理的に逆らわず、上半身から後ろに倒れないように小刻みに足を後ずさりしていましたし、それ以外にできることはありませんでした。同行した桐島さんは、私が一人で逮捕されないように、私の腰のあたりに抱きつくようにしがみついていましたが、私と一緒に押し流されるように移動させられました。

最初に掴まれた時は、それが自民党関係者か警察官かはわかりませんでしたが、ここまでスムーズに人間を強制排除できるのは警察に違いないと、すぐに納得したように思います。なお、体を掴んだり、移動させるなどにあたって、警察からの警告は一切聞いた記憶はありません。

この最初の排除の瞬間にあたまをよぎったのは、「(秋葉原駅前で警備に当たる) 警視庁だってヤジを飛ばす人間を強制排除なんてしないのに、道警はずいぶん乱暴じゃないか」ということ、そして「このまま逮捕されるだろうか」という不安でした。私は、肉声で、単独でヤジを飛ばす行為は違法行為には該当しないと考えた上で今回の行為を行いましたが、しかし警察がその気になれば、罪を犯していない人間をでっち上げで捕まえることだって容易にできます。

AからBへの移動最中、制服警官が後ろから羽交い絞めのような形で私の左肩と右腕を、先ほどの小太りの男が私の左腕を左手で、メガネをかけた背の高い半袖の男が私の胸のあたりを正面から押さえていたようです。

私の体をつかんだ警察官らの力は、訴状添付地図地点Bのあたりで一旦緩みます。このとき、私の頭をよぎったのは、以下のようなことでした。すなわち、「ヤジを飛ばす行為が、なんらかの法律に違反していると警察が判断したのであれば、その場で逮捕するはずである。それにも関わらず、警察官が手をゆるめたということは、私を逮捕するつもりがなく、そもそも違法行為を行ったと見なしていないのだ」ということです。

そこで、私は逮捕するつもりもなく強制排除を行ってきたことへの怒りも合わさって、再び「安倍やめろ」と大きな声で叫びました。すると、先ほど演説が始める前に声がけをしてきた小太りのスーツの男が、正面から私のほうに突進し、私の腕をつかんで押してきました。これと同時に、機動隊の腕章をした

メガネの制服警官も、継続して私の体を羽交い締めのような形でつかみ、東側に引っ張っていきました。他の映像や動画を突き合わせて判断するに、メガネの制服警官はA地点から継続して私の体を拘束し続けていたようでした。

この場面はHBCのニュース映像に収められており、両腕を前後から押さえられた私が「これが民主主義か！？暴力で追放するのか！」と叫んでいます。この時は、意識して後ずさりするという余裕もないほど、強い力で身体を拘束され、排除されました。この数秒後には、地点Cのあたりまで連行され、こちらの体を掴んでいる警察側の勢いが弱まってきたタイミングで、「おい、つかむな、放せ」などと言ったところ、体から手を放しました。

2　地点Cでは、私達を取り囲んだ私服・制服警察官（10人以上）との押し問答が始まりました。逆に言えば、この日の排除に関して、この地点までで警察による声かけなどは一切ありませんでした。

警察官は、私が元いた地点（A地点のほう）に向かおうとすると、私の体を取り囲んだり、複数の警察官が壁のように立ちはだかってきました。さらには、進もうとする私の体にぶつかってくるなどして物理的に阻止してきました。すぐ横では、他の歩行者が当然のように歩いているにも関わらず、私が同様の行為をしようとすると阻まれる、ということが何度も続きました。

このとき、私と同行の桐島さんは、排除する警察官らに対して、「なんの法的根拠があって排除し、また私達の進行を阻むのか」、「私達には日本国憲法で保障された言論の自由・表現の自由があって、ヤジはその一部だ」ということを述べて、抗議しました。しかし、彼らは、「大声出すと演説を聞きたい人の迷惑になる」「危ないから」などと要領を得ないことを口にし、法的根拠についての説明は基本的にありませんでした。

また、このやり取りの中で、ある警察官が「警察官の職務として制止を求めているのだ」と口にした場面もありましたが、それに対して私が「警察官職務執行法ということか？であれば、私がなんらかの犯罪に関与していると判断しているのか？」と質問したところ、複数の警察官は一瞬固まり、質問には答えず、そこからは同様の説明をしなくなりました。これは、警察官ら自身が、自分たちの行為が警察官職務執行法の要件を満たしていないことを認識していたからではないかと思いました。

これらの説明は強制排除に対する説明としては極めて不十分で、それに基づいて移動の自由を侵害されることも不当なものだと思いましたが、話し合いによって打開できるとも思えなかったので、その場で「安倍やめろ」と何度か叫ぶことで、当初の目的、すなわち、「安倍前首相に声を届ける」ことを実現しようとしました。そうすると、周囲の警察官が私に対して、「やめてやめて」「大声出さないで」といったことを口にしましたが、ここでは強制的に掴まれて移動させられるといったことはありませんでした、

その後、前方から詰め寄られる形で後方（東側）まで、比較的ゆるやかに移動させられました。私はここでも「安倍やめろ」と声を上げていますが、同時に警察側に両手を上げて「抵抗しない」というサインを示しているのが、HTBやSTVなどのニュース映像を見るとわかります。

繰り返しになりますが、この日私は、警察による拘束に対して物理的に抵抗したり、ましてや警察官に危害を加えるような素振りは全く見せていなかったと思います。それは、当日対応した警察官にも伝わっていたはずです。

3　このような押し問答が５分ほど続きましたが、警察官らは、私が安倍前首相とは逆方向の東側に進む分には妨害してこないということがわかったため、東方向に進み、（訴状添付地図のＣ地点から北５条西２丁目方向へ）さらに南側へ向かう横断歩道を渡りました。

ここまでのやり取りの中でわかったことは、私達を取り囲み、排除し、説得を試みる警察官の行為の全てが、具体的な法的根拠に基づかないものであり、それに応じる義務は一切ないということでした。

そこで、私は、横断歩道を渡って南側の歩道に向かう途中、周囲にいる警察官の間をすり抜けて、西側へ走って向かいました。最初は車道と歩道の間（縁石の上）を通り、さらに歩道に上がってから東側に向かいました。

私がこの場面で走って移動したのは、周囲にいる警察官らが私の「総理大臣である安倍晋三に批判の声を届ける権利」を物理的に、しかも法的な根拠もなく阻止してきたことが直接の原因です。私は安倍前首相に対して声を届けようとしただけなのに、それを不当に阻止されたのです。ここで私が安倍前首相に確実に声を届けるためには、安倍前首相のいる西方向へ進んで、それから声をあげることくらいしか選択肢はありませでした。

しかし、西側へ向かう歩道を走っている途中、(訴状添付地図地点D)、街宣車付近の路上にいた私服警察官と思われるスーツの男によって、正面から抱きつかれるような形で体を掴まれました。このタイミングで、私は再び「安倍やめろ」と叫びました。

まもなく、先ほど私達を包囲していた警察官らが追いつき、そのうちの二人に体を掴まれながら、東側にある駐車場の前の路上（訴状添付地図地点E）に移動させられました。私は移動させられる間も、「安倍やめろ」と繰り返し叫んでいました。

4　その後、私たちと警察官らとの間で、押し問答が起こりましたが、そのやりとりは第２項に記載したものとほぼ同じでした。

警察官らによれば、私たちの行動を制限する行為は「あくまでお願いである」ということが語られていたほか、私が「安倍やめろ」と叫ぶ行為は、「他の人の迷惑になる」という理由で取り囲まれ、静かにするように促されたのでした。またここでは、先ほど私が走った行為に焦点を当てて「あんなダッシュ見せられたらこっちも対応しないといけない」「あなたが何をするかわからないから」といった形での説得が増えました。同時に、「あなたが危ないことするつもりないのはわかるけど」と共感を示すような態度もあり、彼らの主張することに一貫性はないと感じ、正直、呆れた、という印象を持ちました。

そのため、私は警察官らの説得に従う義務もないと考え、警察官に取り囲まれた状態で、断続的に「安倍やめろ」とヤジを飛ばしましたが、その度に警察官たちは「やめてやめて」「静かにして」などと、ヤジをやめるように圧力をかけてきました。

私は、「あくまで安倍に対して抗議をしたいのであって、誰かに危害を加えるつもりはない」ということを繰り返し主張し、つづけて「僕が何するかわからないというのなら、僕の両手両足を拘束して、なんの危害も加えられないような状態にしてもいいから安倍の近くに連れて行ってくれ」と、訴えました。「僕の声を上げる権利を守りながら、あなたたちの（警護・警備など警察官としての）職務を全うすればいいじゃない」とも説得しましたが、警察官らは話をはぐらかすばかりで、決してまともに取り合おうとしませんでした。

また、彼らの中の何人かはこのようなやり取りの中でも、終始耳につけたイ

ンカム（無線機）で連絡を取り合っていたのを目撃しました。これは、彼らの行為が現場の独断ではなく、あくまで北海道警察としての組織的な警備方針に基づくものであり、上司から具体的な指示があったのだと考えるのが自然です。

その後は、ヤジを飛ばすことをやめてからも、安倍前首相が演説を終えるまで取り囲まれ、体で壁をつくられるなどして、自由な移動を物理的に阻まれました。今回の裁判ではそれについて直接争ってはいませんが、この時の警察官による取り囲み行為も極めて不当なものであると私個人としては考えています。

5　また、この地点（訴状添付地図E地点辺り）で私がヤジを飛ばしている最中、携帯電話で動画を撮影していた同行女性の腕にスーツ姿の男（花柄のバッヂをしていた）が、同行女性の腕に掴みかかってくる場面もありました。

男性は、突然「なに撮ってんだ」などと怒声を上げながら、私と周囲の警察官を撮影してたその女性に向かって近寄ってきましたが、これに対して警察官が男性の行為を止めたため、それ以上のトラブルにはなりませんでした。男性は私達の様子を携帯電話で撮影した後、私達を取り囲んだ警察からもさほど関心を払われることもなく、再び、街宣車の方向に立ち去りました。

ここで襲ってきた人物については、UHB のニュース映像において、地下歩行空間を移動する安倍前首相のすぐ近くにいた様子が確認できたことや、赤い菊マークのバッジをスーツにつけていたことから、自民党の関係者と思われます。こうした点からも、警察の重点はあくまで「トラブル防止」という客観的な立場ではなく、「自民党にとって厄介な人間を監視し、排除する」という点にあったのではないでしょうか。

6　ここまでの全ての警察とのやり取りや押し問答の過程で、私の氏名や住所を特定するための職務質問や、危険物を所持していないかどうかを調べる所持品検査などは一切ありませんでした。

もし本当に、警察官が私の行為（安倍前首相のいる街宣車方面に走っていったこと）をもって「危険性がある」「犯罪行為に発展しうる」と判断したのであれば、氏名等を確認する職務質問行為を行うことや、その危険性を判断するための所持品検査が実施されるものと思いますが、現場の誰一人としてそのような行為をしようとする者はいませんでした。

私は警察官と押し問答をする際、基本的に笑顔を浮かべ、論理的・理性的な態度を取るよう心がけていたつもりです。同行した桐島さんが撮影した当時の映像を見返してみても、警察官の発言にジョークを込めて返答するなど、精神的に余裕のある様子が見えるはずです。道警側の主張するような「興奮状態」は、悪質な印象操作に過ぎません。

私がこのような態度を意識して取っていたのは、声を荒げるなどの態度を取れば、警察官はそれだけ強硬になるだろうと思われたからです。私は「安倍に対して批判の声を届ける」という意志と、それに向けた行動は強固で、彼らからすれば執拗ですらあったかもしれませんが、しかし「話も通じない、何を考えているかわからない危険人物」ではなかったことは、現場で対応していた警察官の表情を見ればわかることです。

7　このように警察に取り囲まれた状況が何分も続き、安倍前首相の演説も終了したため、私と同行者２名とは、今度は大通駅近くの三越前（安倍前首相の次の演説会場）に移動することにしました。

この移動については直接の妨害を受けることはありませんでしたが、これまで取り囲んでいた警察のうち 10 人近く（すべて私服警官で、一人を除いてすべて男性）がついてきて、私達の周囲を取り囲むようにしていました。

途中、時計台の向かいにあるビルの屋外ベンチで、私達は座って休憩しましたが、彼らはその際にも少し離れた場所に立ち、私たちへの監視を続けていました。

このまま監視され、取り囲まれた状態で三越前まで行っても、札幌駅前と同様の妨害を受けることは目に見えていたので、私と桐島さんの二人で、訴状添付地図の地点 F からタクシーに乗り、狸小路５丁目付近に移動しました。タクシーに乗ることに関して、警察官からなにか妨害や説得をされることは一切なく、私達はあっさりそこから立ち去ることができました。

道警の主張では、私は安倍前首相に対して危害を加える可能性のある危険人物で、それゆえに移動についてきたということですが、その主張が本当であるとすれば、彼らの警備の目のつかないところへいなくなることを看過しても良かったのでしょうか。疑問が残ります。

タクシーで移動している最中、別行動していた桃井さん（本訴訟の原告 2）

から電話があり、「私もヤジを飛ばしたところ、警察に付きまとわれ、札幌駅前のツタヤに逃げ込んでいる。どうしたらよいか」という旨の相談がありました。私は、「タクシーに乗ったら逃げられるよ」と伝えましたが、「悔しいのでもう少し頑張ってみる」との返事がありました。

8　私達が三越前に到着したところ、ちょうど安倍前首相が演説していました。そこで、大通のツタヤ前の歩道を歩いて進むと、警備の警察官に止められることもなく、他の歩行者や聴衆と同様に進むことができ、ちょうど安倍前首相が立っている街宣車の真後ろ付近（訴状添付地図の地点G）に行くことができました。

ちなみに、道警側は準備書面の中で、「街宣車の後ろに回り込み」などと、この接近性を強調していますが、あくまで一般の通行人が通ることの認められた場所に過ぎません。もし、そこにいることが「警備・警護上の脅威」になりうるというのであれば、それは、その地点まで一般市民が近づけるように設定した道警側の警備上のミスであって、こちらが責められる理由にはなりえません。

私はG地点で「安倍やめろ、バカ野郎」と声を上げました。この時、私が右腕を前に突き出しましたが、安倍前首相がこちらのヤジに反応して、三越側からツタヤ側に一瞬振り向いたからでした。「お前に言ってるんだ」という意思を込めて、右腕を突き出しました。しかし、安倍前首相はほとんど表情を変えず、またすぐに向きを変えて三越側に向き直りました。私が叫び始めてからほんの数秒で、周囲にいた複数の私服警官によって腕や肩を掴まれ、身体を拘束されました。札幌駅前同様、警告などの声掛けは皆無でした。

このとき、警察官の一人からは首をしめるように両腕が伸びてきたため、自身の腕で首を守りながら「首締めるな！」と叫びました。その警官は「首を締めようとしているわけじゃない」と弁明すると同時に、首を狙う力が弱まったように感じました。

他の警察官からは、腕や肩を腕で押さえられましたが、私の目的は、安倍前首相に対して、抗議のヤジを飛ばすことだったので、ここでも物理的な抵抗はせず、ただ「安倍やめろ」という声を挙げ続けました。そして、その状態でツタヤ大通店の南側の歩道まで身体を拘束されたまま、強制的に連行されました。

9　地点Gから身柄拘束が解放された訴状添付地図の地点Hまでの距離は50mほどあり、ツタヤ大通店の南側ドアを通り過ぎる頃まで「安倍やめろ」と声を出し続けていました。

地点Hまで移動させられてから、排除した警察官らとの間で再び押し問答が始まりました。やり取りの内容は、札幌駅前とほぼ同じですが、ある警察官（直前に首を締めようとしてきた人物）は「選挙の自由を妨害するようなことはしないで」「言論の自由はあるけど、ここでやるのはおかしくないか」と言ってきました。

札幌駅前で対応した警察官は、「演説を聴いている他の人の迷惑になるから」との回答が主で、「演説妨害になる」という趣旨の声がけは一切なかったのですが、三越前での排除の際は、私の発言行為が公職選挙法違反に該当するかのような発言となっていました。

しかし、私の発した数秒のヤジ程度では公職選挙法における演説妨害罪になりえないことは、警察官らも知っていたはずなので、このように法律的に成り立たない理由に基づいて私への排除がなされたことの不当性を明らかにするものと思いました。

また、私が警察官らとやりとりをしている最中に、F地点まで私達をつけていた私服警察官と私と行動を共にしていた宮野さんが、ぞろぞろと駆けつけてきました。合流した警察官にはあまり焦っている様子はなく、警察官の一人は「またやったの？」とヘラヘラ笑っていました。なお、道警側は準備書面の中で「警備失敗だったね」と私が口にしたことをピックアップした上で批判していますが、これは「批判のヤジを阻止すること＝警備」という、現にこの場で生じていた文脈と警察の行動にのっとったものであり、「警備失敗」というのは「私のヤジを止められなくて残念だったね。」という意味合いに過ぎません。その意味で、道警の批判は完全に的外れだと思われます。

私達はこれ以上食い下がってヤジを飛ばしても、また排除されるだけだろうと思ったため、声を上げることはあきらめ、安倍前首相の演説場所から離れることにしました。

しかし、その際も、札幌駅前からついてきた10人ほどの警察官がそのまま私達の移動する横や後ろについてきました。その後、私達3人が狸小路にあるビルに入ったところ、店内までは入ってきませんでした。そして、私達が、一

時間ほど経って店を出た後には、それらしき姿は見えませんでした。

その後、大通駅まで歩いて、解散しました。これが、この日起きたことの一部始終です。

10　本件に関する道警側の主な主張は、「大声を上げた男性と周囲の聴衆とのトラブルから犯罪行為が起こることを防ぐために移動させた」とのことですが、現場で私達が体験した出来事からは大きくかけ離れています。もしも彼らの言うとおりのことが事実だとすれば、そもそも公式見解を発表するまでに7ヶ月もかける必要があったのか、疑問に思います。

道警側の訴訟での主張を総合すれば、「ヤジは危険を生み出す行為であり、それを排除するのは正当である」ということになりますが、これは事実上の「ヤジ排除方針」「ヤジ禁止令」です。この時点で「語るに落ちる」状態ではないでしょうか。

もしも道警側の主張する通り、政権や自民党に対するヤジや批判が「トラブル」「危険行為」であると仮定しても、ヤジは「実際に起こる可能性の十分あること」です。そのような具体的な「警備上の脅威」に対して、道警側は一体どのように事前の対策を講じたのか。言論の自由を尊重しつつ、同時に「トラブル」を防止するための策はあったはずですが、それらを検討せず、ただ「ヤジを排除する方針」しか採用しなかったとすれば、それは道警側の怠慢であり、言論の自由という人権をないがしろにした、非民主的な態度だと言わざるを得ません。

以上

甲第 54 号証

令和元年（ワ）第２３６９号　国家賠償請求事件
原　　告　原告番号１，２
被　　告　北海道（代表者知事鈴木直道）

陳　述　書

２０２１年 3 月 25 日

札幌地方裁判所民事５部合議係　御中

原告２　桃井

氏名 [redacted]

１　私が安倍首相の演説に行った理由

２０１９年７月１５日、友人に誘われて自民党の演説を見に行きました。時間に遅れたせいで友人たちと落ち合うことができず、ひとりで演説を聞いていました。

普段から怒りをもっている問題はいくつもありますが、このときは、自分の生活に格段の打撃を与える２０１９年１０月からの消費税増税のことで、毎日怒りと不安でいっぱいでした。文字通り政治を私物化し、それが明らかになっても白々しく責任を逃れようとしている政治家が、さらにわたしの首を絞めようとしてくることが許せませんでした。

２　会場の様子と私が声を出した理由

札幌駅の南口広場に着いて私は友人を探しましたが見つけることは

出来ませんでした。周りには、日章旗をもった人やプラカードを持っている人、立ち止まって見ている人、携帯電話で撮影しようとしている人、ただ通過しているだけの人など、いろんな人がいました。

会場の混み具合ですが、道路に面した最前列は自由に動けないほど人がいたと思いますが、私の周りは、すぐ前に人がいた状況ではなく、手を伸ばしても誰にもぶつからない程度の距離がありました。ですので、私と周囲との間には、他の人が入り込めるには十分な間隔がありました。実際、その後警察官が私の周りを取り囲んでいますが、他の人を押しのけていた様子はなかったと思います。

私は、どう考えても不正な政治をしている当時の首相を支持する（ように見える人）がたくさんいる事実がショックで、気分が悪くなってきたので帰ろうかと思ったとき、友人の大杉さんの「安倍やめろ」という大声が聞こえました。彼が大人数に取り囲まれ、あっという間に持って行かれるのが見えました。明らかに異様な光景でした。

しかし演説は平然と続き、聴衆も、特に違和を感じている様子はありませんでした。彼の主張が「オカシなやつの戯言」として処理され、矮小化され、何事もなかったかのように空間が動いているように見えました。

周りの多くの人が「安倍総理を支持します」と書かれたプラカードを掲げる中で、安倍首相に抗議する声をあげないと、安倍首相による政治に反対する意見など無いということになってしまうと思いました。たった一人が声をあげ、それが排除されただけで終わっては、その抗議の声はノイズであって排除されるべきものとして、排除も受け入れ得るものとして処理されてしまうと思いました。いまの政治に怒りのある人間はここにもいることを知らせなければいけないと思いました。

3　私が排除された状況

私は意を決して、少し前に出て、立ったまま「増税反対」、「自民党反対です」と叫びました。道警は、私が前に進みながら叫んだと言っているようですが、私は体をかがめて力の限り叫んでいますので、叫んだ時はその場で立った状態でした。道警のいう、叫びながら前に進むというのは、体をかがめて声を振り絞っていた私にはとても難しい動きですので、やっていません。

また、私が誰かと喧嘩になりそうな雰囲気など全くありませんでした。私の声を嫌だと思う人がいたことは、当然だと思います。しかし、私が警察官以外の誰かから押されたとか、小突かれたとか、怒鳴られたとか、引っ張られたということはありませんでした。私も、安倍首相に声を届けようと思っていただけで、周りの人に接触したりして物理的に働きかけるつもりもありませんでしたので、誰かに接触したということもありませんでした。

ところが、その後、長くても１０秒ほどで数人に囲まれ、いきなり街宣車と反対の方向に押されました。道警は、説得した・移動を促したといっているようですが、そのようなことはありません。いきなり押されたのです。興奮していたから分からなかった、ということもありません。映像を見ても分かるとおり、私は、連れ去られることへの抵抗をしていますが、話していることは普通の内容です。一生懸命声を上げていますが、無理やり連れて行かれるという暴力を振るわれるまでは冷静でした。ですので、周りにいる人たちが私のことを撮影していたことにも気づいています。

私は、どこに連れていかれるかも分からず怖かったので、必死で、もとの場所に留まろうとしました。動画でも分かりますが、あっという間に北側へ連れていかれたので反対に南側へ移動しようともしてい

ます。排除される前にきちんと安倍首相に抗議の声を届けるために、一瞬でもいいからこの人たちから離れて声をあげようと考えていました。ですので、このとき私は本当に必死に抵抗しました。安倍首相に対する抗議の声を公道であげることは、誰にでも許されているはずです。それを暴力でつぶそうとされれば、誰でも必死に声を上げ続けようとするはずです。一方的に連れ去ろうとされたら、誰だって抵抗すると思います。ところが、周りにいた人は、誰も私を助けてくれようとしていませんでした。制服姿の警察官がいたようですが、その警察官も、全く止めようとしていませんでした。そのためもあって、私は一人で、力の限り、連れ去ろうとすることに抵抗しました。

大声を上げただけで排除される法律がある訳はありませんし、法律を守らせることが仕事である警察官が、何も説明せず、一方的に連れ去るなんてことをするとは思っていませんでした。私はこうした前提でしたので、はじめは自民党の関係者が私の声が邪魔だと思って私を連れ去ろうとしているのだと思っていました。私は、いきなり連れ去ろうとするなんて、このあとこの自民党の関係者からもっと暴力を振るわれるかもしれない、連れていかれたら大変だと思っていました。ですので、後から警察だと知ったときはとても驚きました。

私は、法律違反とは考え難い、大声をあげただけですので、警察が出てくるとは考えてもいませんでした。なんの法律に違反しているのかを聞いても「大声出さないで」とか「落ち着いて」などとしか言われず、具体的な法的根拠は何も示されませんでした。誰とも知らない大人数の屈強な人間たちに突然連れ去られそうになって、落ち着けと言う方がどうかしています。私は身長が１５９センチと決して大柄ではありませんので、屈強な人間複数人に囲まれるだけで身の危険を感じました。

4　アピアドームへ至る途中

必死に抵抗をしましたが、何人もの警察官に力づくで移動させられました。私が両腕をそれぞれ別の警察官に引っ張られ、背中を押されているシーンが動画でずっと撮影されています。このときも私は、警察官だと言われていないので、自民党の関係者だと思っていました。

アピアドームへ至るまで、ずっと警察だと言われていません。警察手帳も見せられていません。問答無用で移動させられました。本当に怖い思いをしました。

道警は、私がベンチを蹴ったと言っていますが、動画を観れば分かりますが、そんなことしていません。そもそも、コンクリートのベンチを蹴れば足が痛いので、そのようなことをするはずがありません。警察官が私をベンチに座らせようとしていたので、私は、脚を突っ張って、無理やり座らされないように抵抗しただけです。

アピアドームまで来て、座るように言われましたが、屈強な人間に取り囲まれている状況で、落ち着いて座ることなどできるはずがありません。

彼らは、やっと警察だと明らかにして、警察手帳も見せました。しかし、警察手帳を開くだけで、名乗ることもしていません。私は、私を排除した法的根拠を聞きましたが、警察官は分かるような説明をしてくれませんでした。

警察官から「危ない」ということも言われていますが、何が危ないのか全く分かりませんでした。危ないのは、無理やり連れ去ろうとした警察であって、私は叫んだだけです。大声を出したからといって危ないはずがありません。結局、私の何が危なかったのか、誰も説明してくれませんでした。

その後の警察官の説明で、危なかったわけではなく、単に大声を出さないでほしかったということが分かりましたが、なぜ大声を出してはいけないのか、なぜ大声を出したら排除されたのかは、いまだに説明してもらっていません。

私は、ベンチの上に上がって、状況を確認しました。警察官と思われる人が１１人もいて、とても驚きました。声を上げただけの私１人を排除するのに１１人も警察官が動くなんて、異常なことだと思いました。

5　その後の移動

私は、アピアドームのベンチの上に立ったものの、すぐに警察官にベンチから引きずり降ろされました。ベンチの上に立つと安倍首相から見えてしまうから私を隠そうとしたのかもしれません。そして、その場に留まることもせず、警察官が私を、ステラプレイスの壁まで連れて行きました。

ステラプレイスの外側には、テーブルとイスが置いてありました。そこには、高齢の女性が座っていましたが、警察官はその女性にどくように指示をし、私を座らせようとしました。私は、その女性に悪いですし、そもそも座ったら周りに立たれて威圧されてしまうので、座ることはしませんでした。

私は、ステラプレイスの壁まで連れていかれたので、これ以上南側へ行くのは無理だと考え、西側へ移動することにしました。ＴＳＵＴＡＹＡ札幌駅西口店へ行きたかったのと、そちらへ行けば警察官が離れてくれるだろうと思ったからです。

ところが、私の予想とは異なり、ここからずっと警察官に付きまとわれます。最終的に警察官と離れるまで９０分くらい、付きまとわれ

たことになります。

西側へ移動し西５丁目通りを北上して、ＴＳＵＴＡＹＡ札幌駅西口店へ向かいました。このときは、警察官が私の前後を歩いていて、さらに横にいた警察官に腕を組まれたりして、とても不快な気持ちがしました。警察官に両腕を捕まれるというのは、明らかに逮捕されたような状況です。私は、周囲の人から好奇の目で見られているようで、とても嫌な気持ちがしました。

6　ＴＳＵＴＡＹＡ札幌駅西口店に至ってからのこと

ＴＳＵＴＡＹＡ札幌駅西口店は、建物の中にありますが、私がそこの建物に入ってもまだ警察官は付いてきました。防犯ゲートの奥に会計する場所があるのですが、ここには店員も客も何人かいました。私は、どこまでついてくるのか分からず不安だったので、ついて来ないでほしいと伝えました。すると、警察官は周りの目が気になったのか、離れてくれました。

警察官が離れてくれたので、私は、借りたいと思っていたＤＶＤを探しましたが、見当たりませんでした。そこで、三越前にあるＴＳＵＴＡＹＡ大通店へ行って探すことにしました。一緒に来ることになっていた友人に電話をして、いま警察に付きまとわれていたことを相談し、このあとどうするのか尋ねたところ、友人が言うには、安倍首相は、このあと三越前でも街宣をするということで、彼もそこに行くと言っていました。いまからＴＳＵＴＡＹＡ大通店へ行けばちょうど安倍首相の演説を聞けると思いましたし、このまま安倍首相から逃げたようになるのも嫌でしたし、何より警察から暴力を振るわれ付いて来られて不安でしたので友人とも合流したかったので、店を出て三越前へ向かうことにしました。

ところが、私が店舗から出ようとすると、なんと建物の入り口付近にさきほどの警察官が２人とも立っていて、私を待ち構えていたのです。私は、げんなりしました。もう安倍首相は札幌駅前にはいないはずで、私が安倍首相に意見を言うことは出来ないはずです。それなのについてくるということは、何が何でも私の邪魔をしようとしているようにしか思えませんでした。

7　ＴＳＵＴＡＹＡ札幌駅西口店を出てからのこと

私を待ち構えていた警察官は、私に「どこ行くの？」、「家に帰るの？」と聞いてきました。私は、三越前に安倍首相の演説を聴きに行くと正直に答えると邪魔をされそうな気がしたので、ＴＳＵＴＡＹＡ大通店へ行くということを答えました。私がＤＶＤを探すために移動することを止めることはしないだろうと思ったからです。

ところが、警察官は、私の前に立ちふさがったり、私の腕をつかんで進ませないようにしてきました。私は、見ず知らずの人が体を接触させてくることにとても不快な想いをしました。また、ずっと付いて来られて、私の行動を常に見張られていることや、私が犯罪者のように扱われているようで嫌な気持ちがしました。

私は、付いて来ないでほしいということを繰り返し言いましたが、警察官は、私の意見を聞き入れることなく、ずっとついてきました。私は、警察官が腕を掴もうとするので、その証拠を残そうと思い、警察官がつかんでいる私の腕を撮影しました。すると、警察官は、「カメラやめよう」「良い気しないから」と言いました。私に対して嫌な思いをさせ続けておきながら、自分が良い気しないからカメラ撮影をやめろという警察官に、なんて自分勝手なことを言っているんだろうと思い、暗澹たる気持ちになりました。

私は、嫌で嫌で仕方なかったので、走って警察官と距離を取ろうと考えました。そこで、道庁のあたりで東側へ向かって走りました。しかし、駅前通りの信号が赤だったので、止まったところ、警察官に追いつかれました。

警察官は私を逃がしたくなかったのか、私の腕をまた掴みました。私は、私に嫌なことをし続けるから逃げたのであって、何も悪いことはしていません。なのにまた私の腕をつかんで離そうとしないので、また、警察官がつかんでいるその腕を撮影しました。すると、警察官は、また、「撮影しないでー」、「個人のあれだよ」「肖像権があるんです。」などと言っていました。ところが、さきほど、私のことをたくさん写真に撮っていたのを見ていましたので、警察官の説明が適当な説明をしていることは明らかで、違法な警察官の行動の証拠を残されたら嫌なんだろうなと思いました。警察官は、自分がやっていることが違法であることを分かっていたんだろうなと思いました。

その後も、警察官が私の腕をつかみ、私がそれを撮影すると、警察官が掴んでいる手を離すということを繰り返しました。

私は、駅前通りをいったん北側へ向かいました。すると、警察官はつきまとっては来たものの北へ進むことは邪魔しませんでした。ところが、私が反転して南側へ行こうとすると、途端に警察官が私の進行方向に立ちふさがったり、私の腕を掴もうとして、私の邪魔をしてきたのです。警察官が私が南側へ行くのを妨げようとしていることは明らかでした。

私と警察官のやりとりは、証拠に出した反訳文のとおりです。読んでいただければ分かりますが、法的根拠などの私の質問に警察官がきちんと答えてくれていないことが分かります。また、警察官が私の自由を抑圧していることについて、意図的かどうか分かりませんが、無

自覚なような発言をしていることも分かります。私は、話が通じず、それでいて私の移動を制限しようとする警察官の対応に、本当に困りました。また、私を対等な個人として扱ってくれていないような態度に、強い憤りも覚えました。

8　ＴＳＵＴＡＹＡ大通り店でのこと

私は、かなりの時間かかって、ＴＳＵＴＡＹＡ大通り店に到着しました。当然ですが、安倍首相は三越前にはいませんでした。街宣車ももうありませんでした。友人の姿も見当たりませんでした。私は、とても残念な気持ちでＤＶＤを探しにＴＳＵＴＡＹＡ大通り店に入りました。しかし、ここでも私の借りたかったＤＶＤを見つけることは出来ませんでした。

家に帰ろうと思って店を出ると、店の入り口にまだ警察官が立っていたのです。もう安倍首相はどこかへ行ってしまったので、私が安倍首相に何かするということはありえません。なので、もう警察官はいなくなったのだと思っていました。ところが、警察官はまだついてくるのです。

私が、もうついてくる必要はないのではないかと言ったところ、警察官は「上司に確認する」と言い、確認した後「やっぱ（ついていかなきゃ）ダメだったわ」と言ってつきまといを継続しました。こんな暴力的な人たちに付いて来られていい気持ちがするはずがありません。私はつきまとってくるのであれば、家には帰れないなと思いました。そこで、タクシーに乗って移動することにしたのです。タクシーに乗ると、警察官はあっさりと付いてくるのを止めました。あれほどしつこく付いてきたのに、なぜタクシーに乗った途端に付いて来ないのか不思議でしたが、安倍首相がもうすでに遠くへ行っていたからなのか

もしれません。だとすると、なぜ店舗で待っていたのか分かりません。徹底した嫌がらせに感じました。

9　私の自由を奪われたこと

結局、ずっと複数の警察に９０分以上つきまとわれました。その間もなぜわたしがつきまとわれているのか、法律を元にした論理的な説明は一切なされませんでしたし、いつ解放されるのかも分かりませんでした。警察官は「ジュース買ってあげるから次の演説場の方向に行かないでほしい」などという舐めた態度でわたしの自由を長時間奪いました。

わたしが当たり前に享受していた自由、人権は、権力がその気になれば一発でなくなるものなのだということを痛感した１日でした。

１０　その後の出来事について

その後、道警に説明と謝罪を求めました。検察庁に呼ばれたので、私が受けた暴力についても説明をしました。その後、警察官の説明をうけての再度の事情聴取というのはありませんでした。

事件から７か月間以上放置されました。

そして、２０２０年の２月、突然、道警の説明を耳にしたのです。

驚いたことに、道警は、私を９０分以上付け回したことについて何も説明していませんでした。私については、暴力的に排除したことだけを取り上げて、その後９０分にわたって付きまとったことは、検討さえしていないのです。道警の説明にあった９事案というのは、私たちが２０１９年１０月の集会で取り上げたものです。私たちが取り上げたものだけを説明したということは、道警や公安委員会が独自の調査検証を行ったのではなく、私たちの言い分について反論をしただけ、

ということを意味します。その道警の反論をそのまま鵜呑みにして、私たちに追加で聞こうともしなかった検察庁と公安委員会にも大変失望しました。

また、検察審査会などでは、どのような資料に基づいて、どのような検討をしたのかも分かりません。検察官の判断について私たちに反論の機会も与えられませんでした。まさか、これほど杜撰な手続きで判断されると思いませんでした。

これはもう裁判所にきちんと判断してもらうしかないと思います。

暴力的に連れだされ、その理由をきちんと説明してもらえず、９０分以上も付きまとわれ移動の邪魔をされる、家まで来るかのような脅しもかけられるというのは、本当に怖いことです。

街宣車の上にいる彼の意見の重さと、地面から発するわたしの意見の重さは同じです。ですので、見下ろされながら一方的に語られるのは本来は不正常なことなのであって、そんなことに慣れる訳にはいきません。舐めた相手にはきちんと抗議しなければ、自分の尊厳は守られません。社会の主人公は、断じて職業政治家ではなく、その土地で生きるひとりひとりです。人は国家の駒ではありません。

この裁判の判決は、今後、日本という国で政治的な意見表明の自由が守られるかどうかの大事な分岐点になると考えます。今回の事件を法的に許してしまっては、市民は安心して政治的な意見表明を行うことが難しいからです。

裁判所には、こんなことは許されてはならない、という当たり前の判断をしていただきたいと思います。

以上